

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34316
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2014～2016
課題番号：26380196
研究課題名(和文) 新しいレイシズムとファシズムのアラブ・アフリカ認識：他律的脱植民地化の陥穽

研究課題名(英文) New Racism and Italian Fascist Perception of Asia and Africa

研究代表者
高橋 進 (Takahashi, Susumu)
龍谷大学・法学部・教授

研究者番号：30136577
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：イタリア国立公文書館でファシズム時代のアフリカ・アラブ植民地支配に関する資料を調査するとともに、関連する研究書を参考に研究を進めた結果、次のことが明らかになった。第一にファシズム指導者のアフリカ観は「文明と未開」の対立という植民地主義的な性格のものであったこと、第二にファシズム体制は英仏との対抗のためにアラブ地域の利用を企図していたこと、第三に、北部同盟のアラブ・アフリカ観は、他律的脱植民地化の結果、第一の面と連続していることなどが分かった。

研究成果の概要(英文)：The results of research are as follows. First, the perception of fascist leaders about Africa and Arab is "Civilization vs Barbarians", typical of colonialism. Second, fascist regime intended to use Arab world to oppose to UK and France. Third, the perception of Northern League about Africa and Arab is similar to that of fascism. There is a particular continuity between them, that is the effect of Italian external decolonization.

研究分野：西洋政治史

キーワード：ファシズム レイシズム 新しいレイシズム 他律的脱植民地化 アジア・アフリカ認識 北部同盟
国民概念

1. 研究開始当初の背景

20 世紀末から西欧で台頭した新右翼政党の外国人排除・反移民・反イスラムの主張は、「新しいレイシズム」と呼べるような特徴を持っている。それは様々な形で各国の外国人政策に影響を与えている。

アフリカの内戦やアラブの激動、とりわけシリア内戦の激化を契機とする 2015 年からの難民・移民の大量の流入によって、ヨーロッパが「閉じたヨーロッパ」に変化しつつある。

1990 年代に台頭した西欧各国の新右翼諸政党のゼノフォビアの特徴が、反移民・反イスラムであることは、近年の新右翼政党の研究や各国の移民政策・ムスリム政策の研究で明らかになっている。しかし、各国における新右翼諸政党の反イスラム・反移民の主張には共通性ととも、かなりの相違点がある。例えば、オランダの自由党やフランスの国民戦線は、「ヨーロッパの基本的な人権、男女平等、自由の原理を否定するイスラムはヨーロッパとは相容れない」という形で、「自由と人権」を擁護する立場からのイスラム批判の形を展開している。他方、イタリアの北部同盟の主張には、「自由と人権」の擁護の論理よりも人種主義的な色彩が強く打ち出されている。このような相違の背景には、各国の植民地支配の歴史と脱植民地化の型の違いがあると考えられる。

すなわち、各国の近年の移民・難民問題への対応には、移民・難民政策(移民・難民受け入れと国内統合)の歴史の相違とともに、各国の植民地支配と脱植民地化の型の違いが反映していると想定される。

イタリアにおいては、「閉じた帝国」としてのファシズム国家の植民地支配と敗戦による「他律的脱植民地化」は戦後のアフリカ・アラブ認識と移民・難民政策、排外主義に影響を与えている。

それゆえ、北部同盟を典型とするイタリアにおける反イスラム・反移民、アフリカ・アラブ蔑視のゼノフォビアの特徴を明らかにするためには、ファシズム期の植民地支配の実態、ファシズムのアジア・アフリカ認識、人種主義の歴史構造の比較、脱植民地化の型の相違の影響の分析など、広いパースペクティブからの研究が必要である。

イタリアの植民地支配の実態についての研究は 2000 年代に入って進んできているが、これらの研究には脱植民地化の型や新しいレイシズムとの関係の視点がない。日本でもこの分野の研究はなく、この空白を埋めることは、新しいレイシズムを分析し、克服する上ではきわめて重要である。

2. 研究の目的

ヨーロッパに広がる新しいレイシズムの深さと構造、各国のその多様性と共通性、特にイタリアの強烈なアラブ・アフリカ蔑視のレイシズムの特徴を明らかにすることを目

的とする。

そのために、歴史的な考察と現代の同時代的な考察が必要である。歴史的な考察としては、ファシズム期の植民地支配の実態、そのアラブ・アフリカ認識、ファシズムの人種主義の特徴、反ユダヤ主義をはじめとする人種主義の歴史構造と比較、脱植民地化の型の相違(英仏の「自律的」とイタリアの「他律的」)とその影響、戦後のアフリカへの復帰の型を接合した研究を行う。

帝国主義期・ファシズム期のイタリアの指導者や民衆のアラブ・アフリカ認識、ファシズム及び「ファシスト帝国」の「国民国家」「帝国国民」観、イタリアの他律的脱植民地化の実態の分析、戦後のアフリカへの復帰の型の英仏との相違、新しいレイシズムと植民地支配、脱植民地化の型の相違との内的関係とその構造を明らかにする。

また、民族共同体論やファシズム国家論と接合し、ナチズム・ファシズムの比較研究の深化に寄与する。

現代の同時代的な考察としては、西欧各国の新右翼の反ムスリム、反移民、反難民の論理の比較考察を行う。

これらを通じて、日本を含め、ゼノフォビアと新しいレイシズムの克服、デモクラシー理論と共生社会の政策構想への寄与を目指す。

3. 研究の方法

第一に、ファシズム期の植民地支配の実態とアラブ・アフリカ認識の研究を行う。そのために、イタリアの植民地支配の研究書とともに、国立公文書館や旧植民地省関係の資料館などで一次資料を収集し、分析する。

また、エチオピア現地で資料を収集する。この作業を通じて、植民地支配の実態分析とファシズムのアラブ・アフリカ認識の枠組みを概念化する。

第二に、ムツソリーニをはじめ、ボッタイ、ファリナッチ、グランディ、デ・ボーノ、チアーノ、バドリオなどのファシズム体制の指導者の人種主義思想とアラブ・アフリカ認識に関する言説を日記や著書、新聞雑誌、研究書などから収集し、分析する。また、それらの思想とファシズム期の国内及び植民地における人種主義政策との関係を明らかにする。

第三に、イタリアの脱植民地化過程を、第二次世界大戦の敗北による植民地喪失という意味での「他律的脱植民地化」と位置づけ、英仏等の脱植民地化と比較して分析する。それを通じて、植民地の独立との葛藤を欠いた「他律的脱植民地化」がもたらす問題、例えば、ファシズム植民地支配期の人種主義の負の遺産の継承、19 世紀的な「イタリア国民国家」理念への復帰、アラブ・アフリカ認識の新たな枠組の未形成などの問題を明らかにする。

第四にデ・ガスペリやマッテイ、アンドレ

オッティ等の当時の政治指導者の言説を収集・分析し、戦後の政治指導者のアラブ・アフリカ認識の特徴を明らかにする。

第五に、これらの研究に基づいて、イタリアにおける新しいレイシズムと植民地支配、脱植民地化、戦後の「国民国家観」との関係の分析枠組や概念化を図る。

4. 研究成果

上記のようなプランに基づいて研究を進めた結果、以下のことが明らかになった。

第一に、ファシズム指導者のアラブ・アフリカ観は「文明と未開」の対立という19世紀・20世紀の植民地主義的な性格のものであった。「ファシズム帝国」を建設したと称したが、「帝国臣民」観念は形成されず、「イタリア国民」と植民地人とは明確に区分され、分離・隔離された。

第二に、イタリア・ファシズムの反ユダヤ主義政策は、ヒトラーに追随することによって、「大国」としての地位を確保しようとするムッソリーニの対独関係優先が重要な要因であった。しかし、それ以上に、リビアやエチオピアというアフリカ・アラブ植民地における人種隔離政策、通婚・性的関係などの人種混交禁止政策が、その後のイタリアの人種主義形成に大きな影響を与えた。

第三に、ファシズム体制はアラブ世界への接近政策を一時期展開したが、その目的はアラブ世界を英仏への対抗のために利用することであった。それゆえ、アラブ世界に対する一貫した政策は形成されず、場当たりの宣伝工作が間欠的に展開されたことが特徴であった。

また、リビアやエリトリア、エチオピアにおけるその支配と征服戦争は、毒ガス使用や住民虐殺、強制収容所の設置など、「未開人」を人間として見ないきわめて抑圧的で残虐なものであった。

第四に、北部同盟の反イスラム・反移民の根底にあるアラブ・アフリカ観は、「文明と未開」という植民地主義的な人種主義の特徴を持っている。それは、第二次世界短戦後のイタリアの脱植民地化が、植民地の人々の独立闘争に直面することも、それと向き合うことも経験しなかった「他律的脱植民地化」であったがゆえに、第二次大戦後においても、旧態以前の19世紀・20世紀初頭の植民地主義的人種主義を継承していることが明らかになった。

それゆえ、イタリアの「アフリカへの復帰」は成功せず、リビア、エリトリアやエチオピアなどの旧イタリア植民地において、「旧宗主国」としての役割を果たすことができなかった。

また、イタリアが移民送り出し国から移民受け入れ国へと変化した1990年代以降も、「移民国家」としての外国人政策、国籍政策の転換を図ることができず、「なし崩し的な移民受け入れ政策」とゼノフォビアの併存と

いう結果をもたらす要因となったことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

高橋 進、幻想の「帝国」とその破綻 ファシズム体制への国民の「同意」はあったのか?、龍谷法学、査読なし、48巻1号、2015年、101-138

〔学会発表〕(計 1件)

学会報告への討論

高橋 進「民族共同体の実在性 感情・消費生活・経済理論(ドイツ現代史学会、2015年9月、神戸大学)『ゲシヒテ』、9号、2016年3月、99-100

〔図書〕(計 2件)

中谷 義和・川村 仁子・高橋 進・松下 洵編、ポピュリズムのグローバル化を問う:揺らぐ民主主義のゆくえ、法律文化社、2017、「南欧におけるポピュリズムの展開とデモクラシーの危機 イタリアを中心に」53-80

高橋 進・石田 徹編、法律文化社、『「再国民化」に揺らぐヨーロッパ:新たなナショナリズムの隆盛と移民排斥のゆくえ』、2016、「エスノ・リージョナリズムの隆盛と『再国民化』 「国家」・「国民」の分解が『礫岩国家』化か』、23-41

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 進 (TAKAHASHI Susumu)

龍谷大学・法学部・教授

研究者番号：30136577

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()